

次郎長

題字
竹内宏

次郎長翁を知る会
会報「次郎長」
39号
令和2年6月1日発行
発行／編集
次郎長翁を知る会
会長 山田健司

生誕一一〇〇年を迎える

次郎長の魅力をさぐる

次郎長翁を知る会 会長 山田健司

時に世の中は大きくなっていた。

徳川幕府の世は終り駿府には家臣とその家族たちが集団で移住してきた。その多くは無縁移住者で港に上陸し粥などが用意され、次郎長は子分たちと炊き出し

に加わって救援活動をやった。

幕臣の杉享一は、博徒の親分が子分たちと波止場で熱心に世話をすることを見て奇麗に感じていた。紹介する者があつて話をすると開墾事業の話だったと自叙伝に書いている。

次郎長は失業者救済を考え明日は我が身と、開墾地探しに連れ立って有度山麓や三保を歩いた。

明治元年九月十八日突然清水港内で幕府の軍艦咸臨丸は新政府軍の



梅蔭寺次郎長銅像

攻撃を受け、二十余名が斬り殺され海に投げ捨てられる事件が起きた。次郎長は

禁制をおかして犠牲者を収容して、向島に手厚く埋葬した。これが壮士墓だ。

この事件での次郎長の義挙は当時の静岡藩内で評判になった。

中でも山岡鉄舟は「到底小人輩の出来

る其當では無い」と次郎長の侠骨を褒め、壯士墓の墓碑銘を書いた。鉄舟は「精神満腹」の大額も書き次郎長は度胸免状をもらつたと喜び生涯自慢した。また廢刀令が出ていないとき、四谷の家に遊びに

来た次郎長に「一生の大事なとき以外には抜くな」と一腰の短刀を与えた。

日露戦争で壮絶な戦死を遂げ軍神となつた広瀬武夫は「次郎長は偉い男だ。人に滅多に惚れない鉄舟たつてゾッコン次郎長に惚れている」と元子爵の海軍軍人の小笠原長生に話して紹介した。

はじめてあつた晩。夜を徹して次郎長の話を聞き「実に大きな人物」と感想を述べている。

小笠原長生は次郎長に「いったいあなたは仲間のなかで誰がいちばん偉いと思っている」と聞いたところ「それは新門辰五郎だよ」と言下に断言し、「仲間のうちでは新門だが、わしには恩人と呼ぶ人が一人ある。この人は最も偉いと

思っている人だ。山岡鉄舟先生さ」と云つた。

清水湊を田川内の河口港から外海港へと、次郎長は港の築造を廻船問屋の日那衆に口説いていた話の相手とは、播磨屋与平すなわち四代与平のこと、次郎長とは親しい間柄であった。

まもなく清水の「湊」は外海の「港」に変つていった。清水港と横浜港とを蒸氣船の静岡丸が就航し、静岡産のお茶は清水港から横浜港に運ばれてアメリカに輸出されていった。

次郎長はお茶の輸出で頻繁に横浜に出かけ、定宿の神風樓主人の山口久米藏の手助けで、横浜商人と清水港廻船問屋経営者との結びつきにつとめた。横浜商人との人脉がある山口久米藏と次郎長は兄弟のような仲であった。

横浜の回漕業者と静岡の茶商、清水港の回漕業者の共同出資で静隆社が設立され、横浜清水港間の定期航路が開かれた。次郎長没後の明治三十二年七月十二日、悲願だった清水港は開港場に指定された。静岡茶は神奈川丸で輸出され清水港は日本一のお茶の輸出港になった。

明治十九年、東京大学医学部を卒業した植木重敏は次郎長と出会い口説かれて海岸通り（入船町付近）に洋医の病院を

開設した。病院誘致だった。

植木重敏は二十二歳と若く次郎長とほ

親子ほどの年齢差があったが肝胆相照らす仲で、次郎長の主治医もつとめ七十四

歳の最期を看取った。次郎長は梅蔭寺に

埋葬され墓標は榎本武揚が書いた。

明治元年から六十年の戊辰の年の昭和三年に次郎長の名を後世に残そうと「精神満腹会」ができ、梅蔭寺境内に銅像が建てられた。昭和二十八年六十年忌には小笠原長生による「是真侠魂」の顕彰碑が壮士墓境内に建てられた。

次郎長はアウトローだった人物とは思えないほどに名士たちと親交し人脈が築かれ、晩年は社会事業に貢献して郷土清水の地に貴重な足跡を残した。次郎長の魅力はいったいどこにあったのだろうか。



さあ来いと富士を背負って立つ男
次郎長生誕200年
生誕二百年記念ロゴマーク

次郎長と港を活かした清水活性化協議会の設立

副会長 府川充宏

以上が設立に関する報告です。

次郎長翁に関する企業・活動団体・各種団体等三十組織二十六人が集まり、以下の事を合意しました。

①会則の制定。

②協議会人事。総会承認。

会長に牧田充哉氏（次郎長生家を活かすまちづくりの会会長）。

副会長に山田健司氏（次郎長翁を知る会会長）・宮城嶋安宏氏（静岡山岡鉄舟会会長）・春田哲也氏（次郎長道中保存会会長）の三名。

しかし、明治以降のその次郎長という人は、「横浜の様に岸壁を作らなければ大きな船のような船は港に来ない。皆さんは岸壁を作りましょう」と江戸時代以来の廻船問屋さんにお願いして小さな岸壁

を清水につくったのが後に、清水が国際港湾となつた原動力と聞きます。

大きく地域に貢献して下さったおへそのお蔭でこの清水は港湾都市となって発展しその恩恵を私達は知らず戴いています。

この恩人に對し私達は「次郎長翁」または「次郎長さん」と素直に尊敬表現した方が良いと思いました。

幹事に飯田一晴氏（静岡商工会議所理事）・伊澤三郎氏（元清水みなん祭り実行委員長）の二名。が選出された。

③活動方針 次郎長翁の地位向上。清水の偉人として確立する事。次郎長が港・清水のブランドの一つとなる。

④キャッチフレーズ

『次郎長が夢見た清水港』

設立総会のこの様子は翌日、十一月二十三日の静岡新聞朝刊に『清水次郎長

観光資源に』「二〇〇年度生誕二〇〇年事業」「官民の協議会設立」の見出しと写真入りで記事が広報されました。

- ・設立趣意書の承認。
- ・次郎長翁地位向上という活動方針確認。
- ・次郎長翁と清水港を活かしたまちづくり事業承認。
- ・清水マリンビルにて設立総会が開かれ、

『生誕一〇〇年へ想う』

— 次郎長が生まれた頃の清水湊 —

対談

副会長 山本量正

(運営委員) 中田元比古

サツカーやちびまる子ちゃん。清水を代表するワードは数あれど、次郎長ほど『清水』の名を売った者はいない。

今年その次郎長が生まれて一〇〇年を迎える。一〇〇年前、その頃の清水みなとはどうであつたか? どんな風土が次郎長を育てたのだろうか?

江戸時代を通し清水湊の繁栄をリードした廻船問屋の末裔でもあり町の歴史に詳しい、当会の山本量正副会長と編集子(中田運営委員)が対談した。

(編集子)

次郎長さんが生まれて今年が一〇〇年ということで、先ずはその生まれた日について触れておきましょう。一般に「一月一日元旦生まれ」と云われておりますが、別説もあるようですね?

(山本)

そうですね、現在の通説『文政三年一月一日元旦説』は次郎長の養子となつた天田愚庵(発刊時は「山本鉄眉(五郎)」が明治十七年に発刊した「東海遊侠伝」の記述を基にしていますが、明治五年に

それは次郎長本人が申告したのでしょうかね? それも興味があるといふのです。いずれにせよ次郎長は、清水湊の美濃輪で薪を扱う船主の高木三右衛門の家に生まれ、間もなく実母の弟で甲田屋とう米屋を営む山本次郎八の養子となりました。その頃の清水の町はどんな感じだったんでしょうか?

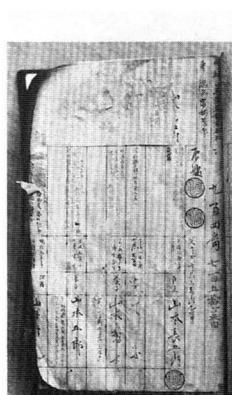
(山本)

文政三年といふと、第十一代將軍、徳川家斉の時代です。いわゆる「文化文政時代」で商業が発展し、「幕藩体制」の最後の繁栄期から衰退に向かう時期です。

俳諧、滑稽本、読み本などの文学や浮世絵などの美術、歌舞伎などの芸能に代表される町人文化が栄えた時代です。

この時代の清水湊は、皆さんご存知の廻船問屋が米や塩の輸送で活躍してと聞く「東海遊侠伝」の出だしの一節ですね。

これは、その後に展開される次郎長のドラマチックな生き様を暗示するようなエピソードで、読者の興味を一気に引き込むには十分のインパクトがあります。一方「十二月十日」説は、戸籍に依るものなのですね。これらは公的な届出ですから信憑性はありますけど、やはり



清水次郎長壬申戸籍
戸田書店発行『人間次郎長』より

いました。徳川家康に特権を許された

廻船問屋は当初四十二軒と言われていますが、次郎長が生まれる七年前の文化十一年（一八一三）の駿府代官の調べでは

三十九軒となっています。また少し時代は下りますが文久元年（一八六一）の清水町の戸籍調べ（銘細書上）によると、戸数七三八戸のうち港関係が約五〇%、漁業関係が三五%となっていて、「湊」に大きく依存していたことがわかります。

「駿府」や「江戸」とは違った「清

水氣質」というものが培われていたと思

います。

（編集子）
なるほど。その氣質について東海遊侠伝では、雨風の荒海に商機を見出し果敢に航海する実父の（通称）雲不見三右衛門を引き合いに、次郎長がその血を引いている事を強調していますね。

三右衛門の高木家も、廻船問屋だった



（編集子）
たしかその頃、水野忠邦の天保の改革とかで株仲間の解散令があつたり、特権を持っていった廻船問屋以外の船主等にもチャンスが訪れて、一攫千金を狙って新

（山本）

「東海遊侠伝」には三右衛門は『航海を以て業となす』とあり、また『数隻の船を有す』とあります。家康から特権を得たいわゆる「廻船問屋」ではなく、一匹狼的な「船持船頭」でした。それも『嘗て勢州海を航す』とか、その船は『舟子（かこ）十四人』の記述もあり、相当大きな船をもち手広くやっていたように書かれています。

次郎長研究家の田口英爾氏の著書から

は、清水港と駿河湾をはさんで向かい合った西伊豆の土肥や安良里（あらり）に渡り薪、炭、海苔の栽培に使うそだを仕入、清水からは瓦やかき、海苔などを積みだしていいわば海運業を兼ねた商売をしていました。

また時には遠州灘を渡って尾張、伊勢方面や伊豆の南端石廊崎を回って江戸、横浜方面へ航海することもあったようです。

天保四年（一八三三）に始まり天保十一年（一八三九）まで続いたいわゆる「天

保の飢饉」で米価が高騰しだした頃です。届けており屋号を「薪三」とも呼ばれていました。

（編集子）
たしかその頃、水野忠邦の天保の改革とかで株仲間の解散令があつたり、特権

規参入する者もいたり、自由な風が吹いていたのかもしれませんね。

次郎長の養子先の米屋も地勢がら、かなり繁盛したと聞きますが？

（山本）

清水湊の主な取扱商品は「米」と「塩」でした。「米」は現在の清水小学校の地に「清水御蔵」があり、また同島には「甲州廻米置場」がありました。「塩」は瀬戸内の塩を中心に「甲州」向けに大量に輸送されました。

いわゆる清水湊の特権的廻船問屋が主

要な取扱業者だったと思いますが、文化文政のころになると問屋株の譲渡、廃業による入れ替わりなど問屋の間にも変化が起きました。

次郎長が養母のへそくり一〇〇両を持つて出奔し浜松で米の買付けをし巨利を博して清水へ凱旋したのは天保五年（一八三四）十五歳の時のことです。

成長してなんとか家業に就き、そこで

も商売の拡張で養父と衝突し勘当もあつたけど、打ち解けて眞面目に家業に精をだした時期もありました。四、五千金そ

れだけの財産があつて米の相場も読める商才があれば、繁盛している清水の湊で

安泰な暮らしができたはずなのに、そこから何で次郎長は無一文になつて博徒の世界に身を投じていつたのでしょうか？

屋」も解散させられました。天保十四年（一八四三）に改革が失敗し水野忠邦は失脚、株仲間は嘉永五年（一八五二）復活するのですがこの間、いわゆる「廻船問屋」以外の清水湊の米屋とか海運業者、蒲原など周辺地域の業者が大いに商圈を拡げたと考えられます。

「東海遊侠伝」には次郎長が天保六年に養父次郎八から相続した資産は「四、五千金」とあります。相当の大店だったと思われます。

「仁侠へ向った転機とは――

（編集子）

米屋の次郎八のもので経済的に何ら自由ない環境。それゆえの不良の典型的なべきかそれとも実父三右衛門譲りの荒い気性譲りか、少年期の次郎長は相当グレてましたよね。

成績してなんとか家業に就き、そこでも商売の拡張で養父と衝突し勘当もあつたけど、打ち解けて眞面目に家業に精をだした時期もありました。四、五千金そ

れだけの財産があつて米の相場も読める商才があれば、繁盛している清水の湊で

頻発していました。

そんな中で天保十二年（一八四一）、水野忠邦の天保の改革が始まり全国の株仲間の解散令が出され清水湊の「廻船問

(山本)

通説としては、天保十年（一八三九）二十歳の時、旅の僧が甲田屋の前を通りた時次郎長の人相を見て「二十五歳までの寿命と予告、太く短く生きるんだ好きな『賭場通い』」を始めた。

そして二年後の天保十二年

（一八四一）、甲田屋に四人組の強盗が押し入り次郎長は重傷を負う。さらに天保十三年（一八四二）には博打のもつれから田川畔で刃傷沙汰を起こしてしまった。そんなこんなで清水に居られなくなり妻を離別して無宿者となって、いわゆる「草鞋をはき」アウトローの世界に入つていったと言われています。そういうことがあったかもしれません、その背景には幕末の混沌とした時代背景や江戸・大阪・甲州の中継点として情報が集まり、遊興の場所もある「清水」という土地柄に加え、先を見る目や侠氣という次郎長の性格があったと思います。

（編集子）

文化や経済が都市部を中心に華々しい一方、周辺農村との経済格差は広がって更に飢饉が追い打ちをかける。庶民の間には御上や地主・商人への不満が爆発し各地で「打ちこわし」が起きた。次郎長の米屋も狙われたのもそんな頃だったん

ですね。またその格差の隙間に賭博産業

が生まれ、多くの博徒を輩出する土壤が出来上がっていた。「眞面目に働いても金など持っているから命を狙われる。」

空しくつまらぬ人生を捨て、賭場の遊侠を度胸と勘を頼りに己の腕一本で生きて行くことを決めた。かつて良く言えば

うなりますか（笑）。

次郎長の後半生には「困っている人がいれば金や衣服を与えた」とか「数々の社会への貢献事業を行った」などのエピソードがありますが、お金への執着心を捨て仁侠へと向かった原点がどうやらこの辺りにありますね。

それでも股旅暮らしで金が無い次郎長に何故多くの子分が付いて行つたのでしょうか？ 一般的に宿場とかに根を張る親分とかなら財源や子分の付く要素は明確ですが・・・。

（山本）

そうですね。天保十三年（一八四一）、次郎長がアウトローの世界に入った時、甲田屋の全財産を姉夫婦に譲り、更に三〇〇〇両あったといわれる資金証文も焼き捨てて無一文で出奔しました。その後は賭場の争いからの逃避行であったり、仇討の旅であったり、いわば「風雪流れ旅」のような状況だったと思います。「東



海遊侠伝」にも路銀に苦労している様子が書かれています。まあ、時にはイカサマをやつたこともあるでしょう。

結局「清水」に落ち着くことは少なく、

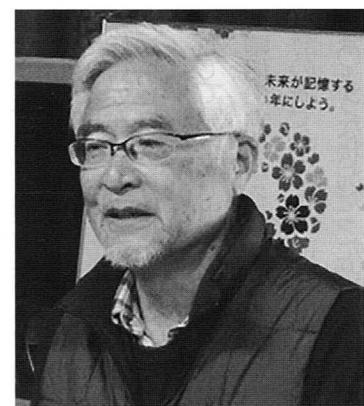
それでの縛張りに根を張り財政的基盤のあった例えば安藤文吉のような豪農の息子でしかも「十手持ち」という一足の草鞋をはいた親分とか、新門辰五郎のような「口入れ稼業」もやっていたような親分などには違った生き方だつたと思います。

大切なのは“お金”より“人”

そんな「次郎長」に多くの子分がついていたのは、ということですが、次のようなエピソードが参考になるでしょう。

(編集子)

なってからは松本屋平右衛門など廻船問屋などがズボンサーになりましたが、このアウトローの時代は「金はない」が「男氣、侠氣」や「義理と人情」たっぷりの次郎長親分とその義侠・人間性に惚れこんだ子分たち、という関係でしょうか。



山本量正副会長

なび

明治以降、いわゆる「社会事業家」となってからは松本屋平右衛門など廻船問屋などがズボンサーになりましたが、このアウトローの時代は「金はない」が「男氣、侠氣」や「義理と人情」たっぷりの次郎長親分とその義侠・人間性に惚れこんだ子分たち、という関係でしょうか。

笑)。

先ほど廻船問屋の松本屋なんかがズボンサーだったとおっしゃいましたが、当時の地元衆は次郎長をどう思って付き合いでいたんでしょうか? 山本さんもその廻船問屋の末裔でいらっしゃいます

が、そのあたり何か伝え聞いていいことがありますか?

(山本)

確かに都田吉兵衛への仇討は「金」よりも「人」、もっと言えば「命」を重んじる次郎長の侠客としての在り方を示す「けじめ」であったように思えます。義理をもって兄弟や子分に接し、ルール

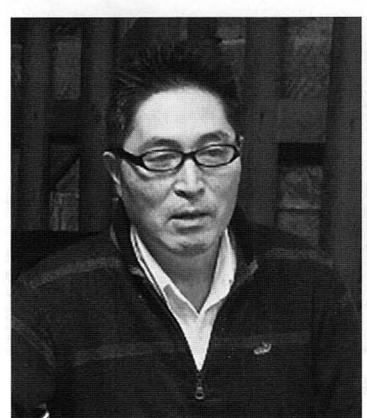
でそれをいぶして蚊やりとして子分たちと一緒に寝たという話、一つには子分たちを叱るのにその子分のメンツを考えて決して人前では叱らなかったという話、三つには「石松斬殺」のときの和解に「金銭」ではなく「仇討」で無念をはらしてやつたという子分の心情を慮った決断

ちよふとの貧乏所帯で「蚊帳」が一つしかなく、自分たちだけが蚊帳に入るのは心苦しいと、妙慶寺の杉の枝を切つてきてしまふして蚊やりとして子分たちと一緒に寝たという話、一つには子分たちを叱るのにその子分のメンツを考えて決して人前では叱らなかったという話、三つには「石松斬殺」のときの和解に「金銭」ではなく「仇討」で無念をはらしてやつたという子分の心情を慮った決断

はないですか?

(山本)

そうですね、次郎長と「廻船問屋」との付き合いを常識的に考えれば一つは「甲田屋」で裏面目に働いていた「天保六年(一八三五)～天保十年(一八三九)」の間に米の仕入れの関係での付き合いが考えられますが、資料がなくよくわかりません。因みに、鈴与さんの前身「播磨屋与平」との関係でいえば、初代が問屋株を買ったのが享和元年(一八〇一)ですが、次郎長が最初の妻を娶り家業に精



中田運営委員

て(ただそれは裏方としての役割が大きかったと思いますが)も認められていました。

富士裾野の開墾、向島に波止場の建設、「静隆社」の設立などの社会事業家として(ただそれは裏方としての役割が大きかったと思いますが)も認められていました。

—廻船問屋と次郎長—

その証拠は、明治十三年（一八八〇）

次郎長の養子先である甲田屋の山本治郎

右衛門が心願人となって再建した「美濃輪稻荷神社」の「玉垣」に刻まれた数多くの廻船問屋の名前で分かると想います。

例えば、鈴木與平、青木久吉、天野九右衛門、石野源七、小川藤兵衛、深江仙助、北村三郎、鈴木平六、芹沢文吉、日比忠三郎、北村新兵衛、山本三四郎、山本長兵衛、遠藤市蔵、山本清五郎、柴田五左衛門、月浦與四郎などです。

これら廻船問屋の日々衆との間のエピソードとしては次のようなものがあります。

四代鈴木与平が横浜に商用で行く際用心棒のようなことをしていたとか、頼まれて「未廣」に出する子分衆のためにご飯を分け与えたとか。

また私の曾祖父である山本清五郎（本町の廻船問屋「山本屋清石衛門」の養子で、明治に入り酒屋に転業）のところによく通りがかりに入ってきた酒は飲まずにお茶を飲みながら興に乗ると昔話をよくしていったとか。

更に、松本屋平右衛門は前にお話した

ように最大の支援者だったようですね。次郎長と一緒に、清国に渡ろうなどと話しあっていたとか。

（編集子）

アウトロー時代の次郎長を可愛がったのは、梅蔭寺の宏田和尚や入江岡の医者山田昌庵など意外と良識人がいて、あと実父の雲不見の三右衛門も何かと援助した形跡がありますね。確かにやや煙たい感はあるけど、争いごとは清水では起きたなかったという点では堅気の衆には迷惑かけなかった。しかし次郎長が、廻船

問屋をはじめ清水の民衆の心をグッと掴んだのはやはり咸臨丸事件における義挙

が頭を抱え困窮した。その窮地を次郎長が体を張って解決したんですから、相当評判を上げたのではないか。

（山本）

一つ不思議に思うのは、そもそも次郎長は博徒として常に幕府から追われる身であったでしょ？ いわば敵対関係にあつたし、実際多くの博徒は徳川に対抗する官軍に就いている。

しかし次郎長は、維新で江戸を追われ駿府へ移住してきた徳川の幕臣の救済活動をしたり、咸臨丸戦没者の埋葬をしたり、徳川を助ける動きをした。敵味方や損得といったものを超越し、ただただ目の前の困窮者の支援をする。そうした原動の何かがきっと次郎長にはあるんですね。

（編集子）

そうですね。「弱きを助け、強きを挫く」維新では官軍に対し徳川が非常に弱い立場となつた。そこに次郎長の真骨頂であ

る侠客魂に火が付いたのでしょうか。

侠客は単に喧嘩に力で強いというだけ

ではなく、むしろ未然に喧嘩を仲裁する能力こそが評価されたといわれます。次郎長はこの幕末維新の混乱の中で『官ど民』の間に立ち、その仲裁能力を大いに発揮したのだと思います。またこれは次

郎長の様な地位や利権、私利を求めるニユートラルな人間だからこそでき得たことで、伏谷如水駿府藩差配役から授かった警固役もそうした能力や人間性を買われての抜擢だったのだろうと思います。「次郎長さんの様な人がいたから上手くいった！」特に清水港の構築から静隆社の設立あたりの状勢は、あきらかに次郎長を中心に市民が心を一つに発展に向けて突き進もうとしていました。それが山本さんのおっしゃるように、美濃輪の稻荷神社の玉垣の寄進者に現れるのだと思います。



神社の玉垣に彫られた
山本長五郎(次郎長)の寄進名

—次郎長にとって清水とは—

さて『次郎長の生まれた頃の清水』と題して、次郎長というキャラクターが清水からどうして生まれたかを探ろうと、時代背景や地元状勢を通して意見を交わして参りましたが、結局明治まで来ちゃいましたね（笑）。

次郎長は近年、明治以降の後半生の生き方が評価され、「郷土の偉人」としての見直しがされていますが、単に時代の変わり目で上手く転身した訳では無く、前半生から一貫したブレ無い物事の捉え方・生き方があったからこそ成りえたのだ、と話し合った中であらためて認識することができました。山本さん最後は、次郎長について「清水」とは?で締めくくりたいと思いますがいかがでしょう?

(山本)

例えば人の性格を農耕型か狩猟型かに分けた場合、次郎長は後者だと思うのですよ。黒駒勝蔵の様に山の中で生まれていたらちょっと違ったかも知れない。みどり町で生まれ育つたことが、活発な生き方に影響を与えていた。また清水の町が江戸や大坂のような大都市とは違うところだとく港があつて活氣がある。

旅暮のしがほんじだった次郎長が僅かな合間をみて清水に戻っていたのは、やはり港があるという地の利でしょうかね。東西の中継点として情報力、船による海上機動力、いずれもスピード感があつて魅力的だった。

(編集子)

かつて武田信玄がそうだったように、ひょっとしたら黒駒勝蔵も「港・海」というものを手に入れて次郎長に挑んできたのかかもしれませんね。

そんな清水が維新で混乱し経済も未曾有のピンチを迎えた時、次郎長の侠客魂のベクトルが今の清水港の基となつた「新しい港づくり」へと向かった!

(山本)

明治十九年、初代静岡県知事となった関口隆吉に向かって次郎長は「静岡県を猫にたとえると遠江が胴、伊豆が脚、清水みなどは口に当たります。□からどんどん栄養を与えなければ猫は成長いたしません」と清水港未来論を語ったというエピソードがあります。若いころの商人としての勘や、博徒時代の流れ旅の中で、清水の「港」としての魅力や重要性をよく解っていたのでしょうか。

それと抗争に明け暮れる旅の傷を癒す場所という意味でも「みんなの潮風と活

気そして富士山の雄姿」生まれ育った故郷はやはり、次郎長にとって居心地が良い場所だったんだと思います。

後年、清水に腰を下ろして様々な社会貢献を行ったのも、こうした要素から郷土に愛着があつたから、清水を愛してい

(編集子)

静岡新聞・静岡放送

『第九回ふるさと貢献賞』を受賞!

令和二年一月二十五日、静岡市駿河区登呂の静岡・新聞放送会館で表彰式があ

り、山田会長と山本が出席し、表彰状と記念の盾が授与されました。

この「ふるさと貢献賞」は、静岡新聞・静岡放送及び一社が母体の「公益財団法人静岡新聞・静岡放送文化福祉事業団」が『地域の為に献身的な活動を続ける個人、団体を顕彰する制度』です。学校、団体、企業などから多くの応募・推薦が寄せられた中で、今年は、「団体・企業の部」で私共「次郎長翁を知る会」ほか七団体、「学校の部」で五団体、「個人の部」で三人の計十六団体・個人が受賞しました。

報告 山本量正副会長



たからだと思います。次郎長にとって清水とは「愛すべき場所」。それで如何でしょ。

山本さん、ありがとうございました。

を後世に伝え、つながりの輪を広げる活動をしていること』。というものです。私共の会のほかの受賞者には、自然保護活動や高齢者施設の慰問など活動が評価された団体、個人が多くありました。

この受賞をバネに、次郎長生誕二〇〇九年は各種記念事業を大いに盛り上げ、地域活性化に寄与していくこうではありますか。

我が会の表彰理由は『四半世紀以上にわたり、郷土の偉人、清水の次郎長の生涯に関する調査や研究を重ね、その実像

秋の史跡探訪ツアーリー 令和元年十月三十日

『東海の霸権を賭けた「荒神山の決闘」所縁の地を巡る伊勢路の旅』参加報告

運営委員 北村昭夫



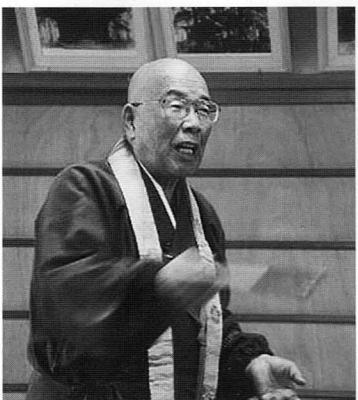
『勇心は男でなれりや 解るモノかよ
義理人情 好いた女房に三行半を 投げ
て長ドス荒神山へ 義理と人情の振り分け
背負えれば 男命の流れ星 義理にから
れて男を立てた 吉良の仁吉たあ手前で
じぞんす』

これは港祭り次郎長道中の吉良仁吉の口上である。

当日は快晴の旅行日和、参加者達も期待しての事だらう集合場所の清水駅には早々と集まり、時間前にバスは出発。静岡駅を経由して直指すは一路荒神山へ。

車中では山田会長と中田運営委員による「荒神山の決闘」に至る経緯が詳しく解説された。皆さん真剣に聞き入り、「俄か荒神山通」になつた頃、バスは鉢鹿ICOを降りて荒神山に到着。賭場争いの発端となつた笠砥山とは調整池を挟んでほんの一キロ程の距離である。この場所での有名な決闘が行われたのだ。

小高い丘にある荒神山観音寺は九世紀初期に創建された真言宗の寺院である。十一面觀世音菩薩を御本尊とし、春日局が寄進したという梵鐘もある由緒ある古寺。私たちはまず庫裡にて村上道雄名譽住職から寺の縁起や次郎長映画を交えた法話を伺う。有り難くもユーモア溢れる

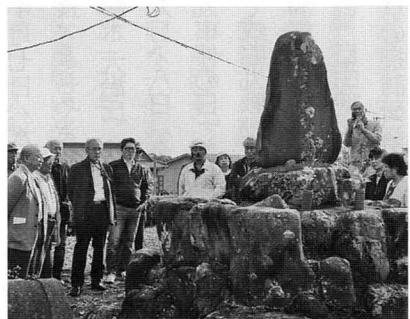


荒神山観音寺講堂にて 村上住職

藤忠さんに解説して頂く。十九才で荒神山の戦いに参加し後に穴太徳の跡目を継いだという人物について、地道に調べ語り繋いでおられる姿に同じガイドとして共感を覚えた。

最後に穴太徳の供養碑へ向かう。住宅街の細い道をくねくねと曲がった民家の玄関口にその碑は有つた。しかしその家の御主人は後に引っ越して来たとかで詳しい話を伺う事は出来なかつた。供養碑の前には説明板が有つた様だが今は無く交流には感銘を受けた。その後境内を巡り本堂や観音堂を参拝、そしてお目当ての一つでもある広沢虎造が建立した「吉の記念碑を見学した。梵鐘では名譽住職自ら春日局の刻字をご説明されたりと、見所や聞き所も多く滞在時間がオーバーする程だつた。

次に伊勢国一之宮である椿大神社へ。先ずは椿会館で名物のとりめしを食し腹ごしらえ。そして幾つかの鳥居を潜りながら長い参道を進み本殿へ。この神社の主祭神は平安と幸福を招く「みちびきの祖神さま」である猿田彦大神を祀る。ご利益あれとお賽錢を供え、隣にある「かなえ滝」で欲張りにも更に祈願?



三重県いなべ市北勢町
神戸屋嘉助供養碑前にて

次郎長と浪曲

私が清水市役所へ派遣されていたのが平成十年（西暦一九九八年）から十一年（一九九九年）の二年間、清水港が開港一〇〇周年を迎えるときでした。多目的ホール（マリンターミナル）のこけら落としで、清水次郎長（一八二〇～一八九三）の浪曲（浪花節）などをやろうということになり、それが「次郎長翁を知る会」と「静岡浪曲愛好会」へ入会するきっかけとなつたのでした。

奇しくもこの原稿を書いている

二〇一九年は開港一二〇年であるとともに、二代目 広澤虎造（一八八九～一九六四）が生まれて二二〇年、来年は次郎長生誕二〇〇年の年となります。

私が幼少の頃は、まだ、ラジオから毎日のように浪曲（浪花節）が流れている時代であり、次郎長の名も自然と憶えました。その浪曲の声はおそらく二代目 広澤虎造であったでしょう。

虎造は、講談師の三代目神田伯山（一八七一～一九三二）の「次郎長伝」を伯山の弟子の神田ろ山（一八九〇～一九四六）から伝授してもらつたのですが、虎造が人気者になる前に、浪

運営委員 伊藤通宏

曲では初代 玉川勝太郎（一八八一～一九二六）が「次郎長伝」を十八番としていました。この勝太郎と三代目伯山は兄弟分で、勝太郎は伯山に先立ち、この

演目を原作者である松廻家太琉から伝授されていました。（伯山は勉強熱心で、次郎長翁を知る会の府川充宏氏の祖父のところへも取材をしに、清水に来ていましたという話です。一代目 勝太郎も

その芸を引き継ぎ、虎造とは異なる清水次郎長を得意としていたようです。）

この松廻家太琉は、浪曲、講談のもう一方のネタ本である次郎長の養子 天田五郎（愚庵）（一八五四～一九〇四）が記した「東海道遊侠伝」に壳講師 青竜（こうりゆう）として登場しています。

青竜は、荒神山の喧嘩（一八六六）に、次郎長側として参加して、伊勢の荒神山から清水まで二日三晩走り続けて、次郎長にこの決闘の顛末を伝えた人物でした。

青竜は、その後、講談師 松廻家太琉（京伝）として、自ら体験した荒神山の喧嘩を、聴衆に語つたのでしきうが、本人は講談師としては大成せず、この演目

を伯山らに譲つたようです。

もし、次郎長が、喧嘩に勝つだけではなく、講談師を従軍ルポとして参加させることによって、全国に自分の名を広められるメディア戦略を持っていたと想像すると大変愉快なことです。

ここに書いたことは、平岡容「浪曲師」、平岡正明「浪曲的」、吉川潮「虎造一代記」などに書かれていることです。が、実際に「清水次郎長」伝がどのようになってしまったかを、私は是非、知りたいと思っています。

秋の探訪研修ツアーは、十月十四日（水）梅蔭寺の次郎長墓石の半身分

け、東京墨田区本所の上萬之碑の見学

の他、新門辰五郎ゆかりの浅草界隈と

慶喜公の谷中靈園を散策します。

十一月十三日（金）記念講演会『私と

清水』直木賞作家村松友視氏（後日詳細案内）

十一月十三日（金）記念講演会『私と清水』直木賞作家村松友視氏（後日詳

細案内）

以上、予定されている催しは、新型コロナウイルス感染拡大の影響により開催日程に変更が生ずる場合がございます。

長再び、スポットライトが当たられはじめました。そして二〇二〇年は次郎長生誕二〇〇年の節目を迎え、官・民での功績の再評価や顕彰をする数々のイベントが行われます。

清水港船宿記念館「未廣」開催の次郎長巷談は、今年は二回の開催を予定。九月十六日（水）『次郎長を語る』三昧線弾語りの白井勝文氏と山田健司会

・十月七日（水）『静岡から見た次郎長・よもやま話』あべの古書店々主 鈴木大治氏

・九月十八日（金）毎年この日を「咸臨丸事件の日」として、築地町社士墓にて咸臨丸戦没者の慰靈の焼香と境内の清掃を行っています。当日午前十時集合。自由参加です。

・秋の探訪研修ツアーは、十月十四日（水）梅蔭寺の次郎長墓石の半身分け、東京墨田区本所の上萬之碑の見学の他、新門辰五郎ゆかりの浅草界隈と慶喜公の谷中靈園を散策します。

次郎長翁を知る会 会報「次郎長」39号

令和2年6月1日発行

発行／編集

次郎長翁を知る会
会長 山田健司

事務局

（公財）するが企画観光局
清水事務所内

〒424-0806

静岡県静岡市清水区辻 1-1-3-103

Tel 054-388-9181 Fax 054-388-9182

www.jirocho.com

minowa.jirocho@gmail.com